

【課題番号】 4-2006

【研究課題名】 侵略的外来哺乳類の防除政策決定プロセスのための対策技術の高度化

【研究期間】 令和2年度（2020年度）～令和4年度（2022年度）

【研究代表者（所属機関）】 城ヶ原貴通（沖縄大学）

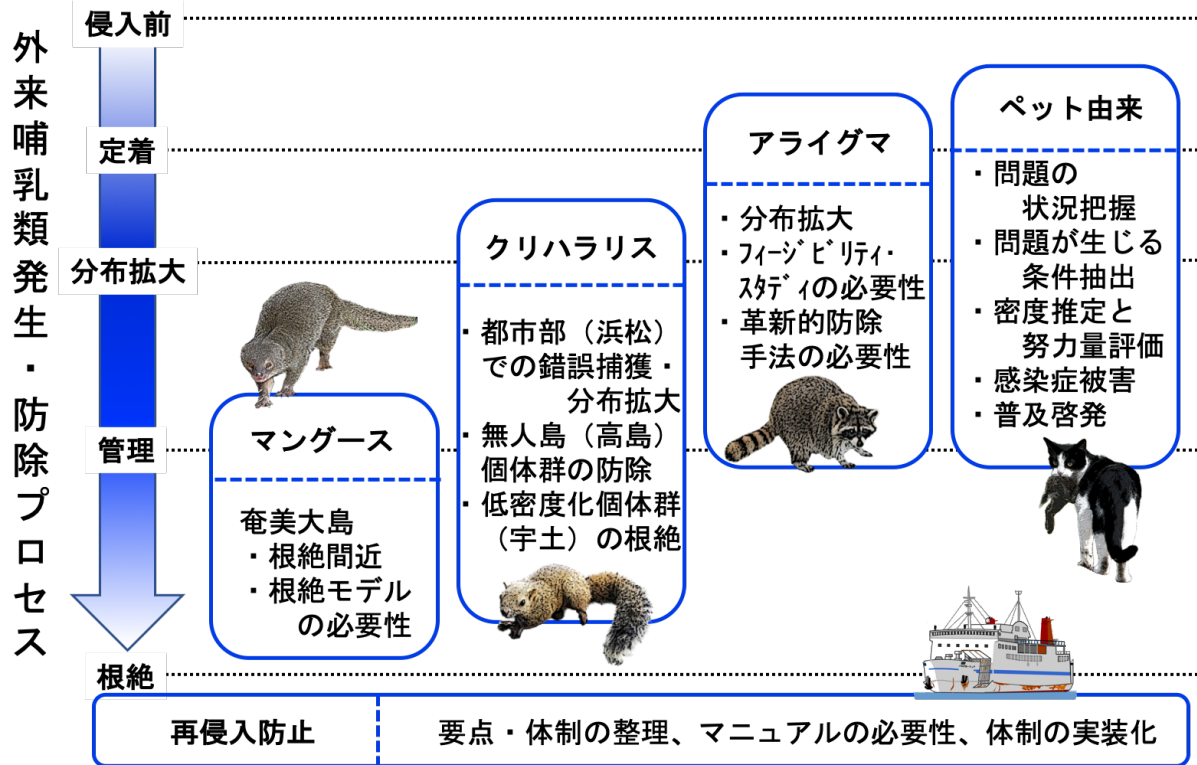
研究の全体概要

外来生物法の施行以降、哺乳類を含む様々な外来生物の防除事業の実績が蓄積される中、対策の内容・手法のフィージビリティ（実行可能性）・実効性・効率性に関する評価の必要性が議論される段階に入ってきた。たとえば、世界が注目する奄美大島のマングース防除事業においては、マングースが超低密度化に至っており、「根絶宣言」に向けた最終評価が急務となっている。また、他の多くの防除事業においても、根絶や低密度管理の可否や事業の目標設定のあり方、在来生態系の回復の有無などの議論がなされはじめるなど状況が大きく変化している。このような進展が得られた今、蓄積された成功・失敗事例を詳細に検討し、様々な事業に共通する基本概念や手法を整理することで、フィージビリティの評価に基づく防除事業の指針の策定が可能となると考えられる。

本研究課題では、防除事業の初期から後期にわたる異なるフェーズにある侵略的外来哺乳類の防除をとりあげ、根絶確率モデルの構築、各種防除手法の開発ならびに防除事業の評価を行うことで、行政によるフィージビリティを考慮した防除事業の展開に資する事を目的として、以下の研究を行う。

①根絶達成が間近に迫った奄美大島のマングースにおける根絶モデルの構築。②熊本県宇土半島のクリハラリスの根絶確率の推定。③宇土半島以外のクリハラリス個体群、アライグマについては順応的管理を含めた防除に関するフィージビリティを考慮した防除方針の指針策定。④侵略的外来哺乳類でありながら対策が遅れているネコに対する防除の効果検証および科学的実装の推進。⑤奄美、小笠原などの島嶼地域を想定した、根絶後を見据えた再侵入・非意図的侵入に備えたバイオセキュリティ体制に関するマニュアル化および実装化。これらを通じて、限られた予算の中で実施可能な侵略的外来哺乳類の防除指針を示すとともに、フィージビリティを考慮した防除のロードマップを提言し、「持続可能な開発目標の目標15（陸の豊かさ）」に貢献する。

侵略的外来哺乳類防除に関する現状と課題



侵略的外来哺乳類の防除政策決定プロセスのための対策技術の高度化

(代表機関：沖縄大学)

